

尾瀬の生い立ち

約 200 万年前に浅い谷の西端で蛇紋岩から至仏山が形成され始めるまで、尾瀬全域は一つの台地でした。火山噴火は付近の他の山々を形作り始めました。これらの山から噴出した粘度が低い溶岩流は、その姿が表を上に向けて地面に置かれた戦士の盾に似ていることから「楯状火山」と呼ばれる幅広く浅い地形を作り出しました。山々が中心の台地を取り囲むと、尾瀬は現在の風景と同じ様相を帯び始めました。

燧ヶ岳はこの地域で最後に噴火した山で、この噴火は約 35 万年前の更新世に始まりました。燧ヶ岳の西側の山腹から流れてきた溶岩流は、当時あった川の流れを変えました。尾瀬沼は、約 1 万年前に燧ヶ岳の南側の溶岩流が、おそらく山の斜面からの崩落にも後押しされて、沼尻川の流れを堰き止めた際に形成されました。

その後、山々から流れてくる河川が、現在は尾瀬ヶ原として知られる地域に沈泥やその他の残留物を堆積させました。川は頻繁に氾濫したり流路を変えたりして、独立した小さな沼や湿地を生み出しました。そこで植物が腐敗し始め、やがて今日台地を覆っている厚い泥炭の表層を作り出しました。